

東京YMCA

2023

山中湖センター100周年

記念感謝会を開催

～100年の感謝と持続的発展を願って～

山中湖センター開設100周年を記念し、これまでのお支えに感謝する会が10月28日（土）、山中湖センターで開かれ83人が集いました。

（文教大学人間科学部准教授）による「YMCA キャンプの持つ力」と題した講演。青山さんから質問に回答者がスマイルフォンを用いて回答する参加型で進められまし

感謝と笑顔に溢れた会

第一部の礼拝では堀光雄牧師が聖書とキャンプについて話され、100年もの間、神様が共に歩み見守ってくださっていることへの深い感謝を覚

えました。高村村長、長田平野区長、日本YMCA 同盟田口総主事からの祝辞の後、中里所長による100周年記念募金の使途報告、上田晶平募金委員長から初の試みであるクラウドファンディングによる募金のお願いと続き、最後に菅谷総主事が謝辞を述べました。

第二部は東京YMCA 評議員の青山鉄兵さん

（文）



参加型で盛り上がった青山氏の記念講演



堀牧師（山中家族キャンプチャプレン）による記念礼拝

山中湖センター100周年チャリティーコンサート 青少年育成のために

未来の子どもたちのための100周年記念募金に協力して「山中湖センター100周年記念コンサート」が10月20日、日本基督教団霊南坂教会で開かれました。約110人が来場し、東京YMCA理事でオルガニストの飯靖子さんによるパイプオルガンと飯頭さんのヴィオラ（写真左）の温かな音色に聴き入りました。東京YMCA高等学院有志によるトーンチャイムの楽しい演奏も（写真右）。後半は、来場者と一緒に、山中湖センターを舞台に作られた「マントルピースのひとりごと」などのキャンプソングを歌いました。

終演後に呼びかけた募金も含め、コンサートの益金は、約40万円となりました。心より感謝申し上げます。（広報室）



山中湖センター100周年記念募金

皆様のご支援をお願い申し上げます
クラウドファンディング実施中（12/30まで）

詳細はこちら



て感謝しながら、今後もより良い関係が作られることを願いました。

二日目の朝は、100周年記念募金を用いて実施中の中高生エンジョイキャンプの参加者と一緒にグリーンチャペルで礼拝の時を持ち、午前中につかの間の山中湖を楽しんでいただいて、記念感謝会のプログラムは終了しました。

目に見えないつながりを実感

キャンプにはグループで過ごす時間が多くあります。グループでの生活は楽しいことばかりではなく試練もたくさんありますが、それらを共に乗り越える過程で、個々人ももちろんグループとしても成長していきます。互いを思いやる気持ちが生まれ、いつしかグループ

は素の自分を出せる居場所、他者を受け入れる場所となり、友だちは「かけがえのない仲間」となります。今回の記念感謝会では、そうして築かれた仲間とのつながりは、目に見えなくとも決して途切れることがないことを実感しました。そして、今までもこれから、青少年の成長を見守り、人々を結ぶ山中であり続けたいとの思いを新たにしました。

感謝会は、その場に居合わせた人たちだけでなく100年の中で積み重ねてきた一人ひとりの思いが集まった会でした。その100年の歴史に身を置き過ぎることに心より感謝したいと思えます。

（山中湖センター所長 中里 敦）



それぞれの山中キャンプの思い出や思いが集まり、次の100年に向けて新たなスタートとなった

◀「山中」でつながり、世代を超えて語り合う記念感謝パーティーの参加者



赤△三角

東京YMCAで約十二年間、職員として奉職させていただいた。離れて久しいが、こうしてまた関わられてとても感謝している。▼在職中は、思えばいつもYMCAの「スピノフ」活動に魅かれていた。もともとYMCAで働きたいと思っていたきっかけも、大学四年に知った開発教育協会（当時は開発教育協議会）の事務所が同盟内にあり、YMCAが開発教育協議会の設立に関わり、開発教育に取り組んでいる団体だからだった。九月に天に召された宮崎幸雄氏は、同盟総主事在任中、開発教育協議会の代表理事も務められ、集会ではいつもアジアや世界に目を向けた教育活動と励まされていた。▼YMCA農林青年塾に出席したのは入職一年目。東山荘で毎年一月に開催される青年塾では、キリスト教×農村×農業×アジア×世界というニッチな共通項で集まった仲間からたくさんの刺激と学びをもらった。アジア学院創設者の高見敏弘先生が塾長だった時代である。▼どちらも私の人生の羅針盤に大きく影響を与えてくれた。YMCAがきっかけとなり、新たな担い手を得て続けている活動は他にもある。いずれも「地の塩」に変わりはない。

（評議員 上條直美）

山中キャンプにゆかりのある人・団体からのメッセージ

山中湖センター100周年に寄せて



初期の家族キャンプ 朝食の様子

今年、夜中にキャンプを誘拐するといふ大胆なストームだった。当然これも「チョウバチ」。

こんなに楽しい家族キャンプも8年後には100周年を迎える。

私は父親が山中湖センターの管理人をやっていたので、山中湖センターに生後間もなくから10歳まで住んでいた。そんな関係から山中家族キャンプとの繋がりは今では70年を超す付き合いとなる。

家族キャンプはキャンパー全員が大きな家族という考え方で成り立っており、他人の子どもであっても叱ることは時々ある。

全員がキャンプネームで呼びあつて生活するので独特のコミュニケーションが出来上がるが、東京で会った時に本名が出て来ず声をかけ損なうことはよく聞く話。私は、四ッ谷のスクランブル交差点で「ダンボ」と大きな声で呼ばれたことがある。

家族キャンプはキャンパー全員が大きな家族という考え方で成り立っており、他人の子どもであっても叱ることは時々ある。

仕掛け、翌朝起きて来た人をビックリさせて楽しむ。旗揚げボールに皆の履物を掲げる可愛いものから、キャンパーの乗用車をメインホール内に運び込み飾り付けをする大掛かりなものまであり、キャンプの前からいろいろな計画を立てて来る若者たちがいる。ちなみに今年は、夜中にキャンパーを誘拐するといふ大胆なストームだった。当然これも「チョウバチ」。



山中家族キャンプ
元委員長
原 博直さん
山中に移住してキャンプ場を守った原直治郎氏のご子息

1931年に日本で初めての家族キャンプを開催
山中家族キャンプ



リーダーOB 木引 大輔さん

さまざまな経験をした大切な場所を応援し続けたい

YMCAそのものもそうですが、山中湖センターも私のサードプレイス。大切な場所のひとつです。本当にさまざまな経験をさせてもらい、感謝の気持ちでいっぱいです。

リーダーになるためのトレーニングで初めて山中を訪れた時は、長所を褒め合う話し合いで自分



1990年の創立以来、施設整備で山中を支える
東京サンライズワイズメンズクラブ
2023-2024会長 長津 徹さん

初めて山中湖センターを訪れたのは1960年代、世田谷YMCAファミリーキャンプのキャビンカウンスラーとしてでした。私はまだ10代でしたが、それ以来、組織キャンプや駐在スタッフを経験し、音楽村などの関わりも経て、現在はワイズメンとしてあるいはYMCA会員として年に何回か訪れる場所になって



父親となり、我が子と共にトーテムポールの前で

キャンプでは、一人ひとりと向き合い、共に楽しむ楽しさを実感しました。この楽しさをやりがいに感じ、その後の進路にも大きく影響しています。

この100年の山中のあゆみの中で、私と同じように多くの人がたくさんの経験をしてきたと思います。

今春、初めての父子での宿泊場所を、馴染みのある山中湖センターにある山中湖センターにし



最後となった第30回山中音楽村で
(2013年12月8日)

ヤーター（創立）メンバーが、ワイズメンとして山中湖関係者が多かったため、チャーターセモノーも山中湖センターの新しくなったレクリエーション棟で行いました。当時は20代のメンバーも多く「何でもできる」精神で1.5トンの木材を運び正門ゲートをリニユアルしたり、グリーンチャペルを造成したりするなど、クラブ事業の舞台としてクラブライフを楽しんでいました。

山中湖キャンプに関わる様々なグループ、家族キャンプ・トーテム・英語学校・音楽村・障がい児キャンプ・etc、その人たちの関わ

1962年から山中で開催
障がい児とボランティアの絆を育む
手足の不自由な子どものキャンプ
社会福祉法人日本肢体不自由児協会
紅谷 聡さん

第8回手足の不自由な子どものキャンプ
(1964年)
現存する最古の山中湖での写真



第13回手足の不自由な子どものキャンプ
(1969年)

1977年に開始
山中でこれからも心に刻まれる体験を
フrendシップキャンプ
NPO法人フrendシップキャンプ
梅田慎一さん

東京から乗ったバスに揺られ、山中湖センターが近づいてくる頃、車窓から外を眺めていると、観望することがあります。観望と5日間を過ごしました。野外調理で作るカレーが徐々に進んでいく中

で、「山中湖センターはこれから、どうなるんだろう」と、少しの不安を覚えてしまいます。

私が初めて訪れたのは13年前、大学1年生の頃でした。「フrendシップキャンプ」にリーダーとして参加し、小学3年から外を眺めていると、観望と5日間を過ごしました。野外調理で作るカレーが徐々に進んでいく中



梅田慎一さん

1の香り、キャンピングの何気ない会話、食堂から聞こえるキャンプソング。手足の不自由な子どもも、そうでない子どもも加えるこのキャンプで、子どもたちと心が通じ合えた感動や、リーダー同士で壁を共に乗り越えた経験は今も大きな財産になっています。

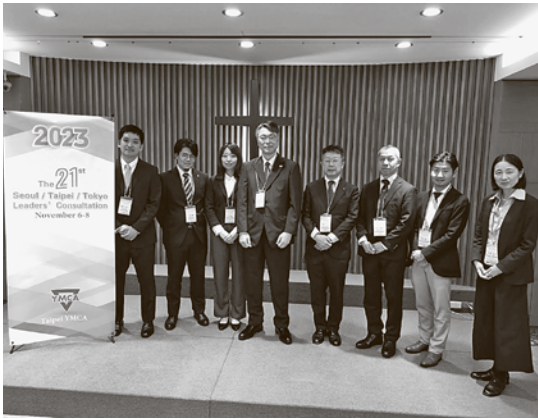
こういった一人ひとりの心に刻まれる体験の礎には間違いなく、山中湖センターの素晴らしい環境があります。一つは大切に残された自然。セ値は変わらず、今後も山中湖センターに息づいてほしいと、心から願っています。

今後もキャンプに参加する人がかけがえのない経験を持てるように。変わる地域の中でも、100年間築き上げてきた価値は変わらず、今後も山中湖センターに息づいてほしいと、心から願っています。

ソウル・台北・東京YMCA指導者協議会

3都市のYMCAが 課題と取り組みを共有

11月6日～8日、台湾の台北市で「第21回ソウル・台北・東京YMCA指導者協議会（S-T-T）」が開催されました。3都市YMCAの理事、会員、職員が集い、東京YMCAからは8人が参加しました。



東京YMCAからの参加者
右から戸坂昇子、古市健、松本数実、榊原正人理事、菅谷淳総主事、大竹薫子、山添慈、綿引裕介

「神の視点と聖書の知恵から現在の経済状況に向き合う」と題した基調講演や、各都市のYMCA活動報告、現地の青少年教育施設の見学などを通して、各都市のYMCAが直面している課題や、課題解決に向けての取り組みなどを知ることができました。

台湾では、少子高齢化による高齢者支援の課題や、青年たちの心身のケアや就学・就労支援が必須とされているなど、日本と共通する課題も見られました。学童クラブに

所属している私にとって印象的だったのは、10代前半から20代前半の青年対象の施設が多く、小学生の居場所が少ないという点でした。小学生の多くは学校が終わったら塾へ通うそうで、街中にも学習塾が多く見られました。現在、いわゆる「学歴社会」も問題視されているようです。一体「幸せ」とは何なのか、誰に

通して、各都市のYMCAが直面している課題や、課題解決に向けての取り組みなどを知ることができました。

台湾では、少子高齢化による高齢者支援の課題や、青年たちの心身のケアや就学・就労支援が必須とされているなど、日本と共通する課題も見られました。学童クラブに



青少年教育施設を視察

の方と交流し、YMCAに関わる方々の思いを知ることができました。活動する地域は違っても、目の前の人に思いを巡らせ、私たちに何ができるかを考え行動に移していく、その姿勢は世界中のどのYMCAにも共通だと知ることができました。同じ思いを持つ仲間

（芝浦アイランド児童高年齢者交流プラザ 大竹薫子）



東京YMCA総主事
菅谷 淳

皆さんは、失敗した時や負けた時、それをどのように乗り越えていますか。「次は成功できるように頑張ろう」と前向きに考えられる人ですか。それでも「失敗したとは思いたくない」「負けを認めたくない」と感じる人でしょうか。

人気フォークソンググループ「アリス」のメンバーで歌手であり作詞・作曲家の谷村新司さんが10月8日に亡くなりました。彼の代表的なヒット曲「チャンピオン」は、王座にいる年長ボクサーが若い

挑戦者に敗北し引退するという、ちょっと変わった内容でした。当時の漫画や映画では、最後は主人公が勝利して終わるというサクセスストーリーが多かったのですが、若かった私は物足りなさを感じたのを覚えています。

バスケットボール選手として2009年に殿堂入りを果たしたマイケル・ジョーダン氏は、こんな言葉を残しています。「私は失敗を受け入れることができません。しかし、挑戦しないことは受け入れられない。」難しいことに挑戦し

ていれば、一度や二度は失敗や敗北に遭遇することになります。逆に失敗や敗北を経験しないということは、挑戦もしていないということになります。ジョーダン氏は、こうも言っています。「10本連続でシュートを外しても僕はためらわない。次の1本が成功すれば、それは100本連続で成功する最初の1本目かもしれないだろう」人は、ひどい失敗や敗北をすると、次からその行動を避けようとして

す。でも、失敗した理由が「挑戦したから」であれば、「次こそ成功できるかもしれない」という気持ちになれるかもしれない。

ただしここからが大事。Y

シリーズ 資料室の窓から<120> 機関紙は何を伝えたか。 休刊号と再刊第一号

本会元副総主事 齊藤 實

東京YMCA機関紙『東京青年』は、アジア太平洋戦争下の1944年2月号を最終号として休刊した。

「愈々配給も窮屈になって前月から斯んなページ数になりました」と。A5判8ページである。戦前は同じA5判でも60ページを常とする格調高い機関「誌」だった。でも、戦争末期では、すべての物資は軍事目的に

わいわいハロウィン in しののめ

東雲エリア在住の子どもたちや育児中の方たちにハロウィンを楽しんでもらおうと、東急住宅リース シノノメスタイルと協力して「第9回わいわいハロウィンinしののめ」を実施しました。10月23日～31日は、手作りのハロウィンフォトスポットを7カ所に設置。多くの親子連れや保育園、学童の子どもたちが立ち止まって写真撮影を楽しみました。10月25日には、コロナ禍で中止が続いていたスタンプラリーを実施。延べ約1,000人が参加し、本格的なコスチュームで可愛らしく仮装した幼児や、自作の衣装を着たきつぷクラブの小学生が「トリック・オア・トリート」の合言葉を伝えてお楽しみグッズをもらいました。



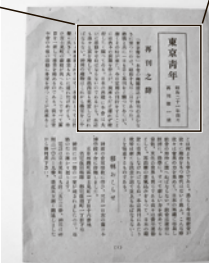
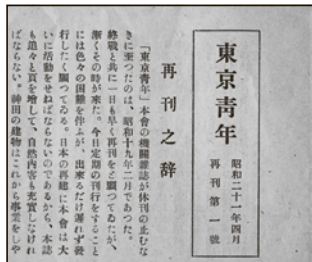
グランチャ東雲のフォトスポットで撮影を楽しむ参加者

東雲エリアには、東京YMCAが運営しているグランチャ東雲や保育園、児童館、きつぷクラブなど8つの施設があり、連携してコミュニティー活動を推進しています。日頃より、「いつも、子どもたちと子育てをしている人たちの味方であり、伴走者でありたい」をモットーに、積極的に活動しています。



東雲児童館のフォトスポット

（東雲地域コーディネーター 口原恵美子）



のメッセージを載せた。「日本の基督教青年会の担うべき責任は実に重大である。戦争中弱められた組織と

指導力が先ず強化されるを要し」と日本YMCA再建に期待を述べた。